

「主に従うように」エペソ5：22-23 堀田修一 20・8・9

※独身の聖書的な意味。「母の胎から独身者として生まれた人たちがいます。また、人から独身者にさせられた人たちもいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい」マタイ19：12。独身は神から与えられる賜物である。独身も結婚も尊い。聖書は、独身の生き方にも、結婚にも、神の導きと意味があると教えている。人と比べる必要はない。「一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります」Ⅰコリント7：7。それぞれの生き方があり、独身でも、結婚しても、就職しても、子育てをしても、「こんなはずではなかった」と思う事が、いくつも出て来る。そんな時に、あわてず、あせらず、あきらめずに祈りたい。神は、すべてを支配し、どんな時も、私達を支えて下さる。「民よ。どんなときにも神に信頼せよ。あなたがたの心を 神の前に注ぎ出せ。神はわれらの避け所である」詩篇62：8。

Ⅰ 前の節とのつながり。前節「キリストを恐れて、互いに従いなさい」：21の実践面→5：22-6：9。主を信じ「神との関係（御霊に満たされる）」に入れられた私達が、主の喜ばれる「人との関係」を持つ為に最も重要な姿勢は→自分達の罪の為に死に、よみがえられた愛溢れる偉大な主「主を恐れて、互いに従い合う（へりくだって互いに仕え合う。主に支配され、へりくだり、人を支配せず、人からも支配されない。）」：21。これなくして、主の喜ばれる人間関係は保てない。仕え合う（真実な会話で理解し合う）のではなく、支配しよう（聞こうとしない、真実を愛を持って語ろうとしない）とする時、関係が悪化する。「御霊に満たされなさい」：18とつながっている21節という土台となるみことばが、夫婦、親子の関係（家庭生活）、主人と仕える立場の人間関係（職場での生活）につながっているという事は、私達が信じて仕えている生ける主は、私達の生活の全領域の主、支配者、救い主である事を示す。生ける主が、共におられない領域や主が影響を及ぼさない領域は、私達の生活にはない。それ故に、5：22-6：9は、ただの人間関係の事ではなく、主のことが繰り返して出て来る。何回、主、キリスト、ご自身、神と出て来るか見てみよう。約20回出て来る。日曜の礼拝の時だけの主ではない。家庭生活、社会生活の中でも、試練の中でも主は、私達と共にいて下さる。「あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、捨てなかった。恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」

（イザヤ41：9，10）

Ⅱ「妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい」：22。

「主に従うように」。まず主に愛されている事、主の恵みを感謝したい。そして、この素晴らしい主に従って行く。その主の御命令は、「わたしが与えたあなたの夫に従いなさい、仕えなさい」。親、夫、妻、子どもは、偶然の存在ではない。「神が与えられた」一人一人。この自覚が、あるのと、ないのとでは、人生は大きく変わる。「神が結び合せたものを人が引き離してはなりません」マタイ19：6。神が与えられた自分の夫に仕える事は、主に従う事の一部、内実。自分の夫に仕える事が、実は主にお仕えする事。「これらのわたしの兄弟たち…にしたことは、わたしにしたのです」（マタイ25：40）。大切な決断をする時、夫に相談し、共に祈り、主に伺う。※夫の願いと主の明確なみこころがぶつかる時は、主の方に従う。「人に従うより、神に従うべきです」使徒5：29。信仰や礼拝に反対する夫にも、それ以外の事では、主から愛をいただいて、心から仕える。夫も、神が与えられた自分の妻を愛する事が主を愛する事。「自分の夫に」。よその夫にではなく（よその人には親切？自分の夫、妻には不親切であってはならない。※ある運転の練習の証し）神が与えられた自分の夫を愛し仕える（夫も、よその女性をではなく、主が与えられた自分の妻を愛する）敬い、夫を立て励ます。※夫も「聖書には、妻は夫に従いなさい」と書いてあるだろうという態度ではなく、まず妻を愛して、妻が、「この人になら従おう」と思ってもらうように

祈りつつ接する事が大切である。夫は妻につらく当たらない。男性である夫は、女性である妻から尊敬され、褒められる時、カづけられ、女性である妻は、男性である夫から愛される（良く話を聞いてもらい、気持ちを受け留められる）時、カづけられる。：33。

Ⅲ 従うべき理由。「なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです」：23。ここでも、ただの人間関係ではなく、キリストが夫と妻の「間に」おられる。結婚は、キリストと教会の関係を現わす。

1. 「キリストは教会のかしら」。①キリストは、教会が成長し成熟するのに必要な栄養の供給源。②キリストが教会をリードし、導き、まとめ上げ、完成される。4：16。

2. 「ご自身がそのからだの救い主」。キリストは、ご自身のからだである教会の救い主。教会（キリスト者の集まり、私達）の世話をしてくださり、保つ方。感謝します。夫も、妻の体、体調を愛を持って気遣う。

3. 「夫は妻のかしらであるからです」。結婚は人間が始めたものではなく、神が始められた神聖なもの。繰り返すが、結婚か独身か、人それぞれの生き方がある。「ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに生き方があります」（Iコリント7：7）。人と比べる必要はない。神から与えられた人生を主と共に歩む。「かしら」は、人格の優劣ではなく、神の秩序、神が与えられた役割の違い。人格は、皆平等。夫は、かしら（神から与えられた役割）としてリードし妻を守り、養う責任を与えられている。妻は夫の奴隷ではなく、助け手（創世記2：18）。妻は夫の欠けを補い（違いがある人との結婚）、助け、共に神の栄光を現わし生きる。結婚前も後も神に造られた男性と女性の違い（体、精神、興味、疲れた時の現れ）、お互いの違い（育ち、好み等）を知って理解し合う。結婚前は、違いが魅力であり、結婚後は、違いが喧嘩のもとになると自覚して祈りたい。※結婚の学びの必要。

4. 「であられるように」夫も。「かしら」（リーダーシップ）も「救い主」（妻を養い保つ、守るという意味）も、夫に期待されている。夫は妻に「私に従いなさい」と言う前に、まず自分自身が、主から愛されているように妻を愛し、「かしら」として正しくリードし、決断をする。妻に決断を任せ、うまくいかないと責めるといふ責任転嫁をしない。「すべての男のかしらはキリストであり」Iコリント11：3。夫は、自分のかしらである主を恐れ尊んで、妻の意見も聞き相談し、主に祈って決断する。妻も夫から、かしらとしての役割、責任を奪わない。夫を立てず、夫に相談せず、事を行わない。エバの過ち＝創世記3：6。夫に相談せず、悪魔の誘惑に負け、神に背いた。夫も、「それはいけない」と、かしらの責任、リーダーシップを発揮しなかった。夫は、妻を養い守るといふ責任を果たして行く。その時、妻は夫を敬い従う。未信者の夫にも仕える。神が最も喜ばれる礼拝を守る事を許してもらう。「自分の夫に従いなさい。たとえ、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまい（愛と真実な行為）によって、神のものとなるためです。夫は、あなたがたの、神を恐れる純粋な生き方を目にするのです」Iペテロ3：1。

※すべての人間関係の秘訣＝私達が、主を恐れ尊んで互いに従い仕え合おうとする時、大切な事は、相手がやってくれたら、やってあげようではなく、まず自分自身が先に自分の分を、まず先に愛して下さった主に頼って果たして行く。みことばを相手だけに当てはめない。そして、偽り、仮面ではなく、正直に、聞き合い、語り合い、向き合い、理解し合う努力を止めない事です。